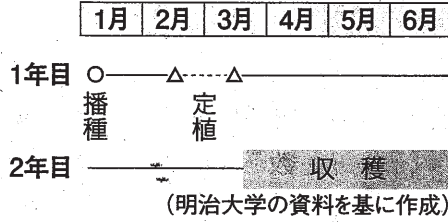


アスパラガスの「採りっきり栽培」の圃場。4月上旬から、茎が太いものが収穫できる（神奈川県川崎市で）

関東での「採りっきり栽培」の作型



長期取りのように、収るのに定植後2年を掛け、種期に茎を立て、葉を広げて光合成をさせ、翌年に向けて株に力を蓄えるようなことはしない。1年間の養成期間に蓄えた株の力を翌年の1作で使い切るため「採りっきり栽培」という名を付けた。従来の長期取りは、凍霜害を避けるため5月に定植し、本格的に収穫す

るのに定植後2年を掛けて株を養成し、収穫は3年目以降になる。「採りっきり栽培」では、定植翌年に収穫できるよう、2月中旬から3月中旬にセル苗を露地に定植し、養成期間を確保する。凍霜害を防ぐため、マルチを敷き、さらに深さ

明治大学とパイオニアエコサイエンスは、アスパラガスの露地栽培で、定植翌年の春に出てくる若茎を全て収穫し、そこで株の養分を使い切る栽培法を開発した。長期取りのように、株を養成しながら何年も使い続けるような管理をしない。1年数カ月で1作が終わるので、失敗を翌年に持ち越さずに済む。他作物との輪作もできる。定植翌年に収穫できるようにするため従来の長期取りより2カ月以上早く定植して株の養成期間を確保した点がポイントだ。

アスパラ露地栽培

株管理楽1作限り

定植早め 病害減り 輪作可能 養成長く

15センチの深い植え穴を開けて定植する。深植えにすることで、風や低温にさらされにくく、早春でも生育が維持できる。苗は、1280×2000穴のセルトレーに、1月に種をまいて育てる。定植後に株を育て、12月に茎葉を刈り取る。翌年は3月下旬から若茎が始め、高値の4月にも出荷でき、6月末まで収穫できる。明治大学の試験圃場(ほじょう)で収穫している株では、6月までに株当たり400本、10本当たり700本の収穫

を見込む。従来の長期取りでは株の管理期間が長期にわたるため、1度失敗するとその後数年は減収のリスクが大きい。採りっきり栽培では1度失敗しても、次作では仕切り直しができる。栽培期間が短いため病害も発生しにくく、次作

との間に土壌消毒もできる。十数年にわたって株を管理する長期取りは、株を撤去した後の連作障害が懸念されるがその心配もない。また長期取りは病害防除で年間10〜15回の薬剤散布が必要だが、「採りっきり栽培」だと、年間3回の防除で病害の発生を抑えられた

という。他品目との輪作もできる。輪作に組み込む作物については検討中だが、アブラナ科やセリ科が有望とみる。明治大学の元木悟准教授は「管理がしやすく、普及性が高い。大規模農家から家庭菜園まで、規模を問わず導入できる」と話す。